

[TRANSIT 2014 バウハウス大 ⇔ 名古屋 ⇔ 名古屋造形大学]

[TRANSIT 2014 Bauhaus University ⇔ Nagoya Zokei University]

名古屋造形大学 現代美術国際交流展 報告

International exchange contemporary art exhibition Report

平林 薫

Kaoru Hirabayashi

名古屋造形大学がバウハウス大学と交流を開始したのは2002年、実に12年もの友好を暖め合ってきた事になる。

その年はバーバラ・ネーミッツ教授、リズ・バッフバー教授、ピーター・ベンツ講師(現在/香港バプティスト大学教授)それぞれの先生方が率いる学生たちの参加があり、名古屋市民ギャラリー矢田を全館使い、初の交流展を開催した。また同年の卒展記念講演にリズ・バッフバー教授をお招きし、その時から両校の交換留学の提携が始まった。

いきなりバウハウス大学の参入ということで、周辺の誰もが驚かれた事と思うが、次の年にはオランダのアカデミーミネルバとの交流、愛知万博の年にはカナダのコンコルディア大学、アメリカピッツバーグのカーネギーメロン大学も加わり、交流が次の人を引き、次の関係を作る交流の連鎖がおきた。

とにかく始まった国際交流、初めて見る複数の外国人学生が名古屋造形のキャンパスに訪れる。それをサポートするということは、我校の学生やスタッフにとって衝撃的な体験だったと思う。

まずお互いのコンタクトを取り合う。日程と交流、展覧会のテーマ決め、最初の作業は相手校に招待状を送る事から始まる。援助金等を両校側からリサーチ申請する。参加学生と作品リストの送付、日程の調整と交流イベントのシミュレーション。宿泊施設の予約斡旋、相手校メンバーの来校までの出迎え。学内のオリエンテーション、まず大事なことは昼休み学食でチケットをどうやって買うのか。

制作の援助は、それぞれの学生が何が必要か聞き出し材料調達、器材の貸し出しなど作品制作、組み立て、搬入一式、のサポートを行う。お互いの言葉の壁、様々な違いを乗り越え融合点



バウハウス大学 Liz Bachhuber 教授による公開授業

を見いだす作業である。

来日教授の公開授業レクチャー企画、展覧会のオープニング、学生の懇親会、ギャラリーにおける学生作品のアーティストトーク、近隣の小旅行や街の散策ツアーを企画する場合もある。広報物の作成と広報活動、HPの作成、展覧会後の記録物作成。展覧会終了後の作品梱包と相手校に安全に作品返送まで。

名古屋造形大学も相手校に出向き展覧会を行う。学内の参加者を募集選出し、志望学生の作品プレゼンテーションを行う。その後の制作指導、まず飛行機の手荷物で運搬、現地で材料調達、短時間で制作が可能かどうか。制作テーマについて相手国や日本、学生のアイデンティティーの問題に触れる場合もある。

また現地で英語で作品を語る事、自己紹介の為のポートフォリオの作成、周辺に足を伸ばし、アートビエンナーレや主要美術館ギャラリーを巡るなど、研修旅行も計画される。

迎える側も出向く側も、学生の役割分担により遂行される。初めての外国人とのコミュニケーション、初めての外国旅行が自分が参加する国際交流展、などというめっちゃくちゃな体験なのである。最初に学生たちに[TRANSIT]というプロジェクトは「自分の中の小さな考え方をやめてメモリを一気に拡張するのだ」という事を呼びかける。

旅をすると様々な困難に巻き込まれるが、展覧会をするという自己目的がさらに負荷をかける。迎える側に立った場合は、決してスムーズに行かないコミュニケーションの中から、「人と人である」という信じ合える感覚に行き着く。アートを通し様々成し遂げた自信が次の自分を作って行くと思う。



TRANSIT 2014 現代美術国際交流展オープニング風景

[名古屋造形大学 ⇄ バウハウス大学 国際交流展]

2014年10月20日(月) - 31日(金) 名古屋造形大学内 D-1, D-2 ギャラリー

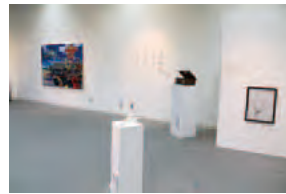


Liz Bachhuber 教授

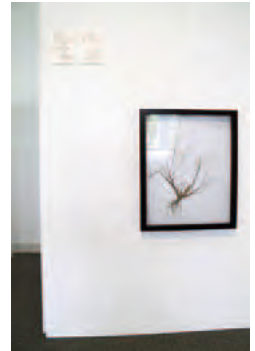


Alex Bellamy

ピンホールカメラの原理を使った作品



Anna H



今回のバウハウス大学メンバー

日本人留学生金子沙織さんはTRANSIT2014の功労者である



Fatemeh Amini 子供服であるがよく見ると恐ろしい形をしている



Albert N. Rossa 近所の廃品回収業者から材料を自ら調達



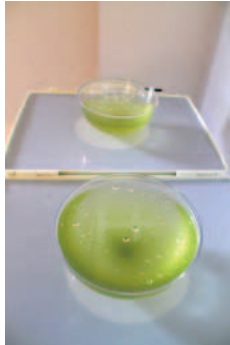
Martin Hoffman スーツケースのモンスター



平林 薫 教授 言葉のサンプル



川立 真由奈



Melissa Holstein 近くの調整池から汲んできた藻を育てる

原 響子



竹浦 眞一朗 上は映像作品 妄想がテーマ



Michael Merkel 左はチョコレートで発電するというテーマ





吉積 惟代



Julian Herstatt 京都にも足を伸ばし制作をした



船田 倫未



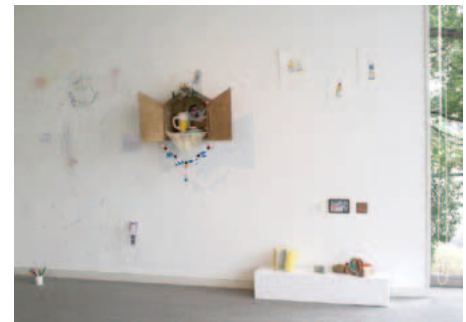
西川 真雪



田中 香里



Nora Manthei
スーツケース会社にスポンサーシップを得た



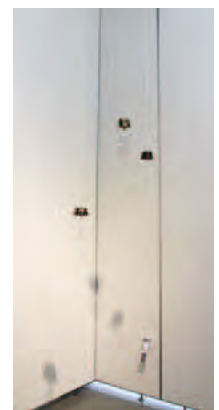
Margarete Kiss
ギャラリーの壁に参加型ドロイング



日比野 ルミ 教授



松井 佳那



野口 万莉乃

[バウハウス大学 in 黄金町 ストリートアート敢行] 2014年10月25日(土) - 26日(日)

今回のバウハウス大学のツアーは、名古屋造形大学での交流展後、横浜黄金町バザールへと活動の拠点を移動した。

横浜トリエンナーレフィナーレの時期に合わせ、このエリア内にある名古屋造形大学サテライトギャラリーで、学生一人一人が行う3時間「Solo Exhibition / 個展」と周辺にてゲリラアートを敢行した。

Margarite Kiss & Julian Herstatt



中央・Liz Bahhuber 教授、右・日比野ルミ教授
名古屋造形大学サテライトギャラリー前にて



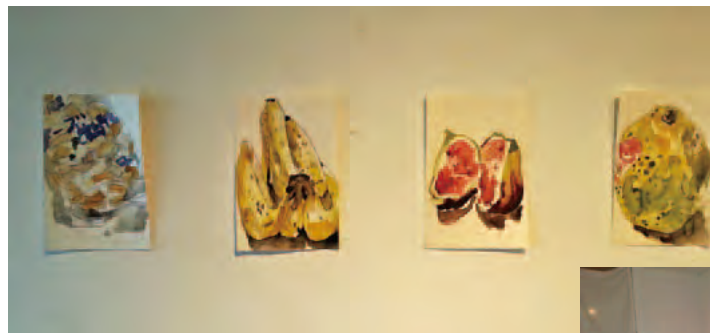
夜ホームレスが寝ている場所で日中「祈りの場」というテーマで
ストリートインスタレーションを制作



金子紗織 今回のTRANSIT の功労者バウハウスの留学生として
お米で絵を描くパフォーマンス



Margarite Kiss 相撲レスラーのコスプレで近所の理髪店より
借りてきた看板で野外床屋パフォーマンス



Anna H 彼女は様々なスタイルでインスタレーション作品を思いのまま素直に作っている。
水彩による食べ物のドローイングを数多く描いていた。
日本にいる間買ってきたものを食べる前に描く。





黄金町に到着したのは夜、ギャラリーの中でエアコンの風に煽られ金色のラミネートシートがガサガサと揺らめいているのを見た。

3時間ごとに展示替えをし、学生一人一人の個展を開催するという。

横浜トリエンナーレの見学に出かけたり、ストリートで食事、学生たちはリサーチを続けながらおもしろいおもしろい、限られた時間の中で制作を始めている。かいだん広場では突然パフォーマンスが始まったり、ワークショップを始めたり。



Fatemeh Amini

ラミネートシートのインストール。
昼間「言葉の贈りもの」と題し、相手にドイツ語のメッセージを送るワークショップを行っていた。

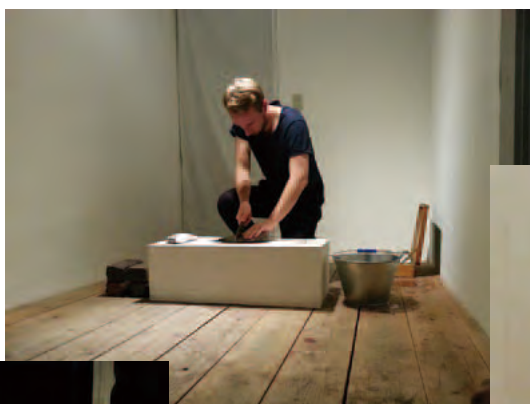


Alex Bellamy

巻き段ボールの上を歩く足跡パフォーマンス
ご近所の梱包屋から調達したものだが、とにかくやってみて記録を取る。

Michael Merkel 「2尾の黒鯛を使ったパフォーマンス」

全体が4部作のシンフォニーになっていて、初めに黒鯛と一緒に全体のレシピを読む。
次に2尾の黒鯛を出刃包丁で二分する。頭部同士、尾部同士、包帯でジョイントさせる。
最後にそれぞれをレンガではさみ包帯で固定させる、というものだった。
なんとも生臭いパフォーマンスだが、終了後ご近所の年配者が説明を求める事しきり。
横浜の下町のアートに対する関心の高さととらえ、黄金町のアートプロジェクトの成功を、十分に物語っていると感じた。



暗くなるとギャラリー前のかいだん広場に集まってくる。



Richard Welz
ポラロイドカメラで日本での生活を切り取っていた。



Liz Bachhuber 教授の学生の通訳によるレクチャー風景

黄金町エリアマネジメントから電話があり、バウハウス学生たちの宿舎アパートの大家さんからクレームがあって、屋上を勝手に使って何か危険な事をやっていて、やめさせてほしいという事だった。後でわかった事だが鎌倉観光に行かないグループが、屋上を使って傘プロジェクトの制作をしたという事。

ヨーロッパ人にとって少しの雨でも傘をさす日本人が、どのように映ったのか。旅行中の彼らに提供した傘で、帰国までの短い時間を使って、何でもアートの解釈をしようとする姿勢は、心から敬服したい。

後日事務局に謝りに行った。多分にご迷惑をおかけしたにもかかわらず、バウハウス学生のアートの短期滞在は、素晴らしい評価をいただいたようである。

